

体験版（一部抜粋）

彼氏に浮気されて傷心中の私が、子犬みたいに懐いてくれる会社の後輩さんと温泉旅館に行って、とろけるような溺愛エッチしちゃいました。

河合あひる

（※冒頭に、主人公・東風花が彼氏の浮気を追及する場面がありますが、ここでは割愛させていただきます。）

「……っばい……東（あずま）先輩！」

澆刺な声がして、私は現実に戻された。灰色がかった壁に、明るい蛍光灯。空調の唸り声。ちらつくモニター。後輩の五十嵐くん——五十嵐隼人が不安そうな顔をしながら、私のデスクのそばに立っている。

「あの、東先輩、大丈夫ですか？」

「えっ？」

「体調でも悪いんすか？」

こちらを窺うようなまなざしは、さながら飼い主を氣遣う子犬のようだった。クリッとした大きな瞳が潤んでいる。私は「いや、大丈夫」と、とりつくろって、こう続けた。

「ええと、どうしたの？　もしかして何か分からないことでもあった？」

「いえ……」と五十嵐くんは言いづらそうに口をもごもごさせる。「そろそろ、取引先に向かわなきゃいけない時間じゃないかと思って……オレの勘違いだったら、申し訳ないっすけど……」

ああっ、と短い悲鳴のような声が出て、私は時計を見た。いつの間になんなに時間が経っていたのだろう。大急ぎで、モニターから資料を探して、プリントアウトした。そろそろ出なければいけないのに、何の準備もできていない。

「オレ、正面に車まわして待ってますんで！　先輩、慌てなくてもいいっすから！」

五十嵐くんが、走ってフロアを出る。癖のある焦茶色の髪の毛が、ぴょんぴょんと跳ねていて、なんか本当に子犬みたいだ。私より三つ年下だけど、それよりも、もう少し幼いような印象を受ける。明るくて、聡明で、

氣遣い上手……その性格ゆえに他の先輩からも可愛がられている。仕事ぶりも真面目だし……私も、もっと頼り甲斐のある先輩にならないと。そう気合を入れて、準備に取りかかった。

その後、なんとか取引先に間に合ったものの、社内で転びそうになったり、修正前の資料を持ってきてしまったり……他にも散々、いつもはしないミスばかりをして、取引先の反応はイマイチ……私は、となりに五十嵐くんがいることも忘れて、ああでもないこうでもない、脳内反省会を繰り広げた。

帰りの車内。夕日に染まったビルが流れてゆく。いつもと変わり映えない、街の風景。新卒五年目で、ある程度のことではできるようになったと思っていたけれど、こんなにも初歩的なミスをしてしまうなんて。

「あの、先輩」とハンドルを切りながら、五十嵐くんがそっと声をかける。

「先輩が良ければいいんですけど、今日、飲みに行きませんか？」

「えっ、今日？」

向こうから誘ってくるのが珍しくて、声が上擦ってしまった。

「はい。なんか、用事とかある感じですか？」

「いや、ないけど……」

「もしかして、彼氏さんから止められてます？」

「いや、それは大丈夫」私はあの日のことを思い出す。「もう別れたから」少しの沈黙のあと、彼は静かに言った。

「オレ、奢りますよ」

キツと唇を結んで、真っ直ぐに前を見つめている。夕日が彼の顔にも当たって、目の色素が柔らかな茶色をしていた。私は、思わずその表情に見惚れそうになったが、慌てて首を横に振る。

「いやいや、ダメだよ！　じつ、自分のお金なんだから大事にしないと！」
なんて……何、お母さんみたいなことを言ってるんだろう。五十嵐くん

も同じことを思ったのか、くつと眉が下がって、弾けるように笑った。犬齒がチラリとのぞく。

「たまにはご馳走させてくださいよ。先輩にはいつもお世話になってるんで！」

五十嵐くんはこちらをまなざした。いつも通りの愛嬌のある表情だった。「前、前見ないと危ないよ」と、とっさに口をついて出る。彼は「分かっていますって！」と軽く手を振りつつ、素直に正面を向いた。私は、彼のような後輩を持つことができて、幸運なのかもしれない。そう思いながら、助手席の背もたれに身体をあずけた。

私たちは帰社したあと、軽く事務処理に取りかかった。五十嵐くんのほうが先に終わったようで、そわそわとしながら私のデスクまで来る。

「オレ、先に行ってますね」と私の耳もとに唇を寄せた。「あとでお店の

URL送っておきますんで。では失礼します」

屈託のない笑顔でそう言うと、彼は、周りの従業員に気持ちの良い挨拶をしながら、職場をあとにした。

「なんか彼、この頃、明るくなったよね？」

女子社員たちが、仕事の手を止めて話しはじめた。お茶を淹れたり、お菓子をつまんだりして、残業時特有の緩やかな空気が流れている。

「うん、思った。前はなんか暗かったよね」

「そうそう。この子大丈夫かなって思ったけど」

「まあ慣れてきたんじゃない？ 入社から半年は経ってるわけだし。東さんはどう思う？」

「え？」

「五十嵐くんのこと。指導してるから分かるでしょ？ なんか雰囲気変わったと思わない？」

「ええ、確かに」

入社したての五十嵐くんは、いつも疲れた表情をしていて、ずっと全身がこわばっていた。はじめは緊張しているのかな、なんて思っていたのだけど……彼は前職のとき、年上の女性社員からひどい扱いを受けていたらしく、その傷を負ったまま、この会社に来たということが分かって……。

でもそれは、なんとなくこの場では共有してはいけないことのような気がして、少し話を濁して切り上げた。

（……あのときは、本当に大変だったなあ。）

五十嵐くんは、私に声をかけられただけで肩をびくつかせていたし、普通に話しているだけで身体が縮こまっていたので、それを見た同僚に注意されたほどだ。あまり厳しくない方がいいんじゃないの、と……。五十嵐くんの癖なのか、処世術なのか、先回りして気を遣ってくれることがあって、ありがたかったのだけど、そのときは強迫的にそれをやらなければ

ならないというような感じがひしひしと伝わってきて、あまり気持ちの良
いものではなかった。

「あの、五十嵐くん……私って、そんなに怖いかな？」

彼が入社してから、ちょうど一ヶ月経った頃。純粹に、私に対しての印象を聞きたいと思って、腹を割って話すにはお酒が必要だよ、という正直な考えで、彼を飲みに誘った。それすらも、彼を萎縮させる材料だったと知ったのは、後のことだけだ。

「この際だから、色々と言ってほしいな。私、誰かを指導するの、初めてでさ。至らないところがあつたら直していきたいの」

目の前のビールに、じっと鋭い視線を落としながら、五十嵐くんは呟くように言った。

「……それ、信じていいんですか？」

まるで人間にいじめられた子犬のような警戒心。物々しい雰囲気が漂っ

ていた。

「うん……もちろん、だけど……」

「本当に言っているんですか？　怒鳴ったりしませんか？」

「ええっ！？　どうして？？」

後に本人から聞いたことだけど、例の女性社員とのふたりきりの飲み席で、こんこんと詰められた経験があり、それが一度ではなく、何度も、何度も。翌日も仕事があるにも関わらず、深夜に及ぶこともあったらしい。時には、低身長であることにまで言及され罵られた、と話していた。五十嵐くんの身長は、私よりも少し高いくらいだから、おそらく百六十五センチ前後で、他の男のひとと比べたら低いほうだけど、そんなの仕事に関係ないことだし、わざわざ指摘するほどのことじゃない。

いずれにしても、そのような事情を知らなかった私は、内心ビクビクしていた。まさか、彼の氣に触るようなことをしてしまったのではないかと

思い、今までの行いを高速で振り返っていたのだ。

「東先輩は……」と言う声で、私はとっさに身構えた。「今まで出会ったなかで、一番良い先輩です」と彼は目を潤ませる。「というか、職場のみなさん、すごく良くしてくださいます。オレ、ここならやっていけそうです」

一筋、また一筋と、とめどなく涙があふれる。私は、このようなことになるとは思わず、ほっと安心した反面、ひそかに慌てた。あまり深く事情に立ち入っても悪いので、彼の肩に軽く触れながら、慰めるしかなかった。

「そう思ってくれて、私も嬉しいよ。何があったのかは、今は訊かないでおくけど……泣けるときに思いつきり泣いたほうがいい！ 今日飲もう！」

……なんてことがあったなあと思いながら、帰り支度をしていると、五十嵐くんからメッセージが来る。『ここにいるんで』という文章とともに、お店の URL が送られてくる。そこはまさしく、私が初めて彼を飲み連れ

て行った、焼き鳥屋さんだった。

お店の引き戸を開けると、なかはうつすらと煙っていて、炭火のいい匂いがした。お客さんがちらほらというなか、五十嵐くんは立ちあがって、私に向かって手を振った。

「先輩！ こっちです！」

奥の座敷だ。周りががやがやとしても、彼の声はよく通る。私はパンプスを脱いで、かまちに上がり、彼のいる席まで向かった。テーブルには、空いたお皿が二、三枚ほど重ねて置いてある。

「お腹すいてたんで、先、頼んじやいました。何か飲みます？」

サツとメニュー表を渡されて、私は「ええと……」としばし迷った。

「じゃあ、ビールで」

「了解っす。オレも同じの頼もうかな。すいませーん！」

五十嵐くんは、飲み物以外にもあれこれ手際よく注文した。早速、ビールが来て、乾杯する。しばらく仕事の話をしていたが、ほどよくお酒がまわってきた頃合いに、五十嵐くんは、突然、私にこう尋ねた。

「んで、なんで彼氏さんと別れちゃったんすか？」

その目がとろりと座っている。頬も上気していて、じつとりと酒気を帯びたとき特有の肌つやをしていた。彼はネクタイを緩めて、シャツを第二ボタンまで開く。前の飲み会のときは、ここまでリラックスした彼の姿を見ることがなかったので、ふいをつかれてどきりとした。

「あー、実はね……」

私は一部始終を話した。彼の浮気相手は同じ職場のひとであったこと。たまたま好きな映画が同じで、語り合っているうちに、そのまま身体の関係を結んでしまったこと。そして……相手が年下だったこと。

「信じられる？ 新卒の女の子に手出してたんだよ？」

「彼氏さんって、いくつくらいのひとなんすか？」

「同じ年。二十七。五歳差だよ。すっごいシヨックでさあ……」

私はビールをあおって、ひとしきり元彼の愚痴を吐きだした。こんなことを聞かせてしまつて五十嵐くんには申し訳ないけれど……誰にも相談できなかつたので、今さら止めることなんてできなかつた。

「年下で、職場で……ほんと、何がよくてそういう恋愛するんだろうね。リスクしかないわけじゃん」

「……っすね」

五十嵐くんは、ビールをグイッと飲みほした。店員さんを呼んで、追加の焼き鳥とビールの注文をする。あ、ビールは私の分も追加で。

「そうそう」

ふと思ひ出して、私はスマホを取りだした。とあるサイトを開いて、五十嵐くんに見せる。

「彼氏といっしょに温泉旅行に行くはずだったの。キャンセルしないといけないんだけど、もう二週間切っちゃったから、料金がかかっちゃって。友達誘っても、急だからって誰も乗ってくれなくてさ」

本当はこの旅行に行ってから、別れを切り出すつもりだった。浮気の証拠をたくさん集めてから突きつけようと思っていたから。でも、耐えられなかった。彼が自分以外の女の子とそういう仲になっているのに、その事実を知りながら、あれもこれも行動できるほど、私の精神は強くなかった。五十嵐くんは、柔らかく微笑みながら、そのサイトをスクロールする。ときどき手を止めては、感嘆の声を漏らした。

「いいじゃないすか、東北」

「でしょ！ 予約もすぐに埋まっちゃうから、取るの大変だったんだよ」
今の時期なら、雪景色が綺麗なはず。大正ロマン的な街並みに、淡くゆらめくガス灯のひかり。それがとてもロマンチックだったから、ずっと楽

しみにしてたのに。

このときの私はいつもより酔っ払っていて、つい魔が差してしまったのだと思う。気がつけば、こんなことを口走っていた。

「よかったら、一緒に行かない？」

五十嵐くんが、控えめにこちらを窺った。アルコールで充血していた目に、薄らとひかりの膜が張る。

「いいんすか？」

「うん、良いの良いの。だって勿体無いもん、キャンセルするの。次、いつ予約取れるか分からないし」

彼は自分のスマホを開いて、スケジュールを確かめる。ややあって顔をあげた。

「行けます。オレ、楽しみにしてますね！」

嬉しそうにしている彼を見ながら、私は運ばれてきたビールを飲む。男

女で行くのは少し心配だけど……でも、五十嵐くんはあくまでも職場の後輩で、向こうも、ただの先輩だとは思っていないだろうし。

お会計のとき、五十嵐くんは意気揚々と財布を出していたけど、手持ちよりも料金が上回っていたので、あわあわしていた。最終的に、私が少し出すことになった。しょんぼりとした彼を、明るく慰めながら帰路につく。彼のころころと変わる表情や、正直な態度、ときどき抜けているところを見るに、やっぱり異性というより、弟みたいだなと思った。

（中略）

私は、オレンジのひかりだけを残して、布団の中に入った。眠るには早い時間だけど……思ったより、私も疲れていたのかもしれない。ほどなくして、うつらうつらとしてくる。あとちよつとで落ちそうになる……その

とき、隣から物音がした。

「先輩……？」

五十嵐くんが起き上がったのだ。眠そうな声で、もう一度私を呼んでいたが、私は何となく、寝たふりをした。

「先輩、起きてますか？」

彼の半ばささやくような声が、部屋に溶ける。ガサゴソと音がして、彼が立ちあがる気配がした。ためらいがちな足取りで、私の枕もとに近づく。

「東先輩」彼がすぐそばに座った。「本当にごめんなさい」

ふに。と、唇に柔らかいものが当たり、すぐに離れる。いまのは、まさか……と思うや否や、彼は私の唇を貪りはじめた。

「んっ……ふう……」

唇で唇を咀嚼するような勢い。次第に苦しくなって、私は振りほどくように起きあがった。

「いが、ら、し、くん……!」

「先輩」彼の声は冷静そのものだった。「起こしてしまって、すみません」
「なに、してるの……?」

「キスです」

「どうして?」

「好きだからです。オレ、先輩のこと抱きたいです」

今度は私の手をとって、その甲にキスをした。何度も、何度も。それが敬愛のしるしであるかのように。

「あの、嫌だったら、嫌って言うってください。オレ、そのときは先輩のこ
と、あきらめます」

「ええと……」と私は迷いあぐねた。彼はお預けをされている子犬のよう
に、じっと返答を待っていた。けど、いつまでたっても望みのものもら
えないことに痺れを切らして、私の指に唇をくつつけた。

「これから先輩のぜんぶの指にキスしていきます。それが終わるまで、答え出してください」

ちゅっ♡ちゅっ♡と、濡れた音を立て、ときおり艶のある短い息を吐いた。彼の手は緊張のためか、興奮を抑えているのか、かすかに震えている。

「手のほうは、終わっちゃいましたね」

彼は私のかかとをそっと持ちあげて、つま先に唇をつけた。私はとっさに足を逃がそうとしたが、彼の力が強くてびくともしなかった。

「あっ、足にもするの？」

「ぜんぶの指、ですから」

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡と、まるで印でもつけるかのようにキスをする。くすぐったくて、声が漏れる。弱い電流が、ぞくっ♡と背筋を這うような感覚がして、ほんの少し気持ちよさを感じた。

「……どうしますか？」彼は掠れた声で言った。「続き……しますか？」

オレンジ色のあかりのなかで、彼の目がキラリとひかる。このままでは取り殺されてしまうのではないかと思うほど、暴力的な色をしていて、彼は何とかそれを理性の鎖で押さえつけているようだった。

「五十嵐くん、ダメだよ。だって私たち……」

「オレはそういうの関係ないです。年上とか年下とか、職場とか……だって好きになっただけそんなの意味ないでしょ？」

彼は首筋に顔を埋めると、甘噛みをした。ちゅっ♡と吸われて、私の身体が反応する。

「先輩は、どう思ってますか。オレのこと。ただの後輩ですか？ それ以上にはなれませんか？」

「分からない。今までは弟みたいだなんて思っていたの。でも今日は、なんだか男の人って感じがして」もう正直に言おうと思った。「ドキドキする」
五十嵐くんは、私の唇に食らいついた。

「ふっ♡ んん♡ んう♡」

ほのかにアルコールの匂いがする。熱い舌にいいようにされて、私の意識はこのまま溶けていつてしまいうさだった。

「はあ……はあ……♡」

キスをしながら、彼は私の浴衣を脱がせる。ブラジャーのホックに手を伸ばす。ただ金具を外しただけなのに、ぷつんと何かが切れるような音がした。

「先輩、いいんですね？」

私はコクリと頷いた。

五十嵐くんは、ブラジャーを取り払って、胸の輪郭をなぞった。はじめは、ためらいがちな手つきで。次第に大胆になってむに♡むに♡と揉みはじめる。形を確かめながら、両手いっぱいその柔らかさを味わって、深く感嘆するように息を吐いた。

「きれいなおっぱいですね。もっとよく見たいです。電気、つけてもいいですか？」

「ええっ」

私はとつさに胸もとを隠した。前の彼氏のと きだ っ て、明るいところ で した こと ない の に。

「だめ、ですか？」

と 甘 え た よう な 声 を 出 す。上目遣い で 私 を 見 上 げ て い る よう な 気 が す る。私 は、彼 の こ の 態 度 に 弱 い。

「分かった」と頷くと、彼は嬉しそうにしながら電気をつける。私の手をそつと除け、熱いまなざしが身体 の す み ず み を す べ っ て い っ た。

「ああ……先輩、ほんとうにきれいです」

「そんなことないよ……お腹とか、お肉ついちゃってやばいし……猫背だから見栄えとかも……」

「自信なさすぎですよ！ 胸の形とか、腰のあたりとか、ほんとうにきれいですよ」

ふと五十嵐くんを見ると、彼の浴衣もはだけていた。胸もとが大きく開いて、薄く汗をかいている。彼は私の視線に気がつき、はっとした顔をして帯を解きはじめた。

「オレも裸にならなきゃ、ダメっすよね。先輩にばかり恥ずかしい思いをさせて、すみません」

脱いだ浴衣がストンと落ちると、彼の身体があらわになった。白い照明だからか、その肌は発光しているように見え、黒い無地の下着がよく映える。上半身や太ももに程よく筋肉がついていて、私は思わず、吸い寄せられるように、その張りのある肌に触った。

「五十嵐くんも、きれいだよ。普段から鍛えてるの？」

「鍛えてるってほどでもないですけど……筋トレはメンタルにいいって聞

いて、それでやりはじめたんです」

一瞬だけ表情が翳る。私は彼が前職でパワハラを受けていたことを思い出して「ああ、それで……」と納得したものの、そのあと、どう声をかけて良いものか迷った。

「まあ、そんなことより！ オレ、先輩にもっと触りたいです……いいですか？」

するりと彼の手がのびてきて、ふに♡ふに♡と胸に指をうずめる。はじめは戯れるように持ちあげては揉みしだいていたが、次第に指先が乳首を掠めはじめる。

「んっ♡ はあ♡ はあ♡」

「ここ、好きですか？」

「わかんない……♡ あまり、いじつ、たことない、からあ♡」

「へえ」五十嵐くんは悪戯っぽく笑った。初めてみる表情でドキツとする。

「前の彼氏さん、あまりしてくれなかったんですね」

彼は、ぴん♡ぴん♡と優しく乳首を弾いた。

「あっ♡ あっ♡ んんっ♡」

「本当にされてこなかったんですか？　すごく敏感そうですね……先輩は、どう触られるのがいちばん気持ちいいですか？」

そう言いながら、今度は乳首をくり♡くり♡とこねる。指の腹でつぶされて形を変えられるたびに、愛液があふれて下着が濡れた。

「んっ♡ ああっ♡ どっち、も♡ いいっ♡ すきっ♡ すきい♡」

「……ふふ。先輩の、すごく美味しそうです。真っ赤で、ぷっくりしていて……」

彼は、私の片方の乳首にちゅ♡ちゅ♡とついばむようなキスをして、舌で絡めとった。温かい。いや、温かいだけじゃない。ゾク♡ゾク♡と身体中に快楽が抜けていく。強い刺激に逃げようとする、それを察して、五

十嵐くんは私を抱きしめた。

「ああっ♡ だめっ♡ それ♡ むりッ♡」

私があまりにも身を振るので、彼は乳首に薄く歯を立てた。枷のように
はまっている状態で、責められるとたまらなかった。

（歯、立てられたところ、ジンジンする♡けどっ♡きもちいい♡）

もう片方も容赦なく指でねぶられ、私は声にならない叫びをあげた。

（あっ♡ 両方されるのやばい♡ あっ♡ だめ、だめ♡ これっ♡ か
らだおかしくなる♡ あっ♡ ああっ♡♡）

シャボン玉が、限界までふくらんで、ぱちんと割れるように、大きな快
楽がはじけた。身体がグッ♡と勝手にのけぞり、中でイッてるときと同じ
気持ちよさがこみあげてくる。五十嵐くんが乳首から口を離して、私の顔
をのぞきこみながら首をかしげた。

「先輩、もしかしてイっちゃいました？」

「はあ♡ はあ♡ ううっ……だって……五十嵐くんが離してくれないから」

涙目になっている私を見て、五十嵐くんが愛おしそうに微笑んだ。

「ごめんなさい。感じてる先輩が可愛くて、つい」と、私の頭を撫でる。

「乳首だけでイけるんですね。オレ、先輩のもっとエッチなところ、知りたいです」

彼の手がそろそろと、私の下着に指をかける。「レースがついてるの、可愛いですね」と言いながら下ろしていく。つうと透明な糸が引いて、私はとっさに下を隠した。

「恥ずかしいがらないでください。感じてくれてる証拠じゃないですか。オレは嬉しいですよ」

彼は私の手をそっと退けて、そのまま茂みに指を滑らせる。入口に触れると、ちゅっ♡ちゅっ♡と、まるでキスをしているかのような水音がした。

「先輩」と甘い声で囁きながら、彼はクリトリスをきゅっ♡と摘んだ。思わず声が出る。「ここ、さりたいですか？　それとも……」と割れ目をすり♡すり♡となぞる。「ここに指、入れられたいですか？」

五十嵐くんは、薄く骨ばった指にたっぷりと愛液を絡ませた。指の腹がときおりクリトリスをかすめ、入口は彼の指を受け入れたくて、ひく♡ひく♡していた。

「あっ♡　んう♡　こっ、ち♡　して、ほしい……♡」

私は、彼の指をクリトリスのほうに導いた。自然と腰が揺れて擦りつけてしまう。小陰唇を押し退けて、中にうっすらと指の腹が出入りする。

「……どっちでしょうか？」彼は困惑していた。「先輩、はつきり言ってほしいです」

そんな。そんな恥ずかしいこと、言えないよ……。私が口ごもっている、五十嵐くんはハッと気がついたような顔をした。

「オレは、先輩を辱めたくて言ったわけではないんです！　ただ、先輩を気持ち良くさせたいだけで……」

「……リ……ス……で」

「え？」

「……クリトリス、が、いい、です」

私は五十嵐くんの胸に顔を埋めた。恥ずかしすぎて、どうにかなってしまっただった。

「先輩。教えてくれてありがとうございます」彼は私の前髪をかき分けて額にキスをした。「もう、こういうエッチなことを言わせるみたいなこと、させませんから。ほんとうにごめんなさい」

そのかき分けた手が、かすかに震えている。そうだ、緊張しているのは私だけじゃないんだ。ひとつひとつの言葉に気をつけて、傷つけないように慎重に、五十嵐くんはしてくれているんだ。

彼の指が、ふたたびクリトリスに触れる。円を描くようにして、包んでいる皮を少しずつ剥いていく。剥き出しになるたびに敏感になって、身体が痺れたように、びく♡びく♡と震えた。

「んっ♡ んんっ♡ ああっ♡ あああっ♡」

（やばい♡ ぶりぶりする♡ クリトリスって、こんなに敏感になるんだっけ……？♡ ああっ♡ 変な声、いっぱい出ちゃう♡）

「すごい良さそう……」と五十嵐くんは呟くように言った。「はあ……オレも、気持ち良くなりたい」

彼の下着はピンと張りつめていて苦しそうだった。私はこっそりと五十嵐くんのを想像した。なかに入っているところまで思い描いて、ますます彼の手を愛液だらけにしてしまう。

「はあ♡ ああっ♡ んんっ♡」

すべりが良くなって、指が吸い付くようにクリトリスにまとわりつく。

それがよりするどい刺激になって、私はいまにも快楽に押し流されてしま
いそうだった。

「あああ♡ イくっ♡ イくっ♡」

びく♡びく♡びくっ♡と身体じゅうが喜ぶように打ち震える。触ってな
いのに、乳首が緩い快感につつまれた。その快楽の応酬で、また膣がキュ
ン♡と締まる。クリトリスでこんなに大きな絶頂を迎えたのは、初めてだ
った。私はゆっくりと呼吸を整えて、余韻にひたる。

（すっごい気持ちよかった……五十嵐くんの入れると、私、どうなっちゃ
うんだろう）

ふと顔を上げると、五十嵐くんは「はあ、はあ」と息を乱していた。私
の入口に、つぶ♡と中指を沈めた。

「先輩がいくとこ、いっぱいみたい」

その言葉とは裏腹に、彼の表情はひどく辛そうだった。額も髪の毛も、

汗でじんわり濡れていた。

「もう入れる？」

「いえ」と首を振る。野生的な匂いがふわっと立ちのぼったような気がした。「まだダメです。慣らさないと痛くしちゃいますから」

ゆっくりと指を動かしはじめる。はじめは探るような手つきだったのが、次第に激しくなる。まるで自分の指を自身のペニスに見立てて犯しているみたいに。

「んっ♡ んっ♡ はあ♡ ああっ♡」

良いところを掠めては、また違うところへ指が逃げる。快感が昂っては落ち着いてを繰り返えて、私はもどかしくて腰を動かした。

（気持ちいい、けど……いけない……どうしよう）

ふいに指の動きが止まった。五十嵐くんが泣きそうな声でささやく。

「せんぱい、ごめんなさい。オレ、うまく動かせないかもしれないです」

「うん、だいじょうぶ、だよ」

「だから、オレの指つかって、してください。それで、先輩の気持ちいいところ教えてほしいです」

私は五十嵐くんの手を取った。膝立ちになって、そっと腰を落とす。その指を、子宮口の近くへ導いた。トン♡トン♡と叩いたり、撫でるように左右に動かすと、彼の指を奥へ奥へと引きこもうと子宮口が動く。焦らすために抜いて、入口の近くの気持ちいところを擦りながら、クリトリスのほうも構った。ひとりで見られているようで、すごく恥ずかしい。

「すげ、ほんとにしてるみたい……」

彼の目はとろんとゆるんでいて、私の身体をすべっているのに、どこか遠いところをまなざしているかのようにだった。自分のいいように動かしていると、高まるのも一瞬で、私の中は五十嵐くんの指をぎゅっ♡ぎゅっ♡

と締めつけて、その形を覚えようと必死だった。

「あっ♡ はあ♡ はあ♡ んっ♡」

「先輩って、ひとりでするときも、こんな感じに触ってるんですか」

私は首を横に振った。恥ずかしくて言えなかった。

「ひとりっ♡ は、あんまり♡ しなっ♡い♡」

「ほんとうですか？ それにしては自分の気持ちいいところ、よく分かってるみたいですけど」

彼は指先を動かして、子宮口のあたりをなぞった。

「あああっ♡ んっっ♡ だめっ♡ だめっ♡」

内腿が震えて、イきそうになる。

「前の彼氏さんに、教えてもらったんですか？」

奥の気持ちいいところに、ぴたりと指先を置いたまま止まる。もどかしくて腰を浮かせたが、彼はそれすらも許してはくれず、もう片方の手でし

っかりと押さえられてしまった。

「んうっ♡ やだ♡ やだ♡」

イケそうでイケないまま、宙ぶらりんになれる。じく♡じく♡と膾に熱がこもってゆく。指で引っかけて散らして欲しくてたまらない。

「なら、答えてください。じゃないと、ずっとこのままですよ？」

「いやっ♡ このまま、やあ♡」

「やあ、じゃなくて。先輩、ちゃんと教えてください」

冷たくも諭すかのような声色。もう我慢ができなくて、私は正直に告白した。

「ごめっ♡ なさ、い♡ じぶんっで♡ して、ますっ♡」

「本当ですか？ 嘘ついてませんか？」

「ほんとっ♡ ほんとうっ、だから♡」

「そう、ですか」

グリッ♡と急に指で責められ、私は悶えた。

「先輩、また恥ずかしいこと言わせてしまつて、ごめんなさい」

「あっ♡ んうっ♡ うう♡ あああっ♡」

「オレ、先輩をこんなにエッチにしたのは彼氏さんなんじゃないかつて思つて、嫉妬しました。でも、そうじゃなかったんですね。ひとりでこんなところまで気持ちよくして……相当、エッチなこと好きなんですね」

「んっ♡ や♡ すき、じゃない♡」

「嘘つき。オレの指、離さないじゃないすか」

細やかな指さばきで、いちばん欲しい刺激を与えられつづける。もう限界だった。

「あああっ♡ また、いくっ♡ いくっ♡」

目の前がチカ♡チカ♡と明滅する。全身が気だるくなるほどの快楽を受けとめて、私の呼吸はしばらく乱れていた。

「先輩、ほんとうに可愛い。先輩って、気持ちよくなると、お腹のあたりがきゅっ♡で動くんです。それで、イくときに身体が震えて……おっぱいも、乳首もビクビクしてて……全身で気持ちいい気持ちいいっていつてるの、すごい、いやらしいです」

「や……恥ずかしいから、そんなに詳しく言わないで」

五十嵐くんは、きゅっ♡と私を抱きしめた。吐息が耳にかかる。お互いの汗が混ざりあって肌同士がくっついて、そのまま離れられなくなるんじゃないかと思うほど、私たちの身体は噛み合っていた。

「はあ……先輩……入れていいですか？」

下着を脱ぐと、彼自身のもののはすでに勃っていて、痛々しいほどに赤く腫れていた。私は思わずじっと見つめてしまう。彼の身体つきからは想像がつかないほどの大きさだった。

「あの、自分で言うのも何ですが、ひとよりも大きいほうみたいで……」

と「サイズのスキンをつける。興奮による震えからか、それとも緊張のためか、根元まで下ろすのに苦心していた。

押し倒され、入口に彼のものがびたりと当てがわれる。熱い。ピクピク♡と脈打っているのを感じる。彼が少しずつ体重をかけて、腰をすすめていった。膣が圧迫され、私は息をつめる。入れるというよりも捻じ込むといった方が正しい。五十嵐くんは少し進めるたびに労ってくれるのだけど、どうしても苦しい気持ちが入る。

※体験版はここまでです。続きは製品版にてお楽しみください♡